

デザイン・アート活動がけん引する リノベーションまちづくりの実践研究 その2

Practical research on renovation and town management driven by design and art activities Part 2

津村 泰範

TSUMURA Yasunori

池田 光宏

IKEDA Mitsuhiko

徳久 達彦

TOKUHISA Tatsuhiko

山田 博行

YAMADA Hiroyuki

ヨールグ ビューラ

Jörg Bühler

遠藤 良太郎

ENDO Ryotaro

キーワード：デザイン・アート活動、長岡市中心市街地、リノベーションまちづくり

Keywords : design and art activities, central urban area of Nagaoka city, renovation and town management

In order to maintain urban management in the face of rapid population decline, it is necessary to promote the creation of a compact city in Nagaoka by consolidating functions in the central city area and the central part of the merged area. However, in the current state of the central urban area, utilization of idle real estate (low unused space) described above is not progressing. For this reason, the practice of renovation and town management is also desired in Nagaoka.

In renovation and town management, activities related to design and art are one of the essential contents for utilizing idle real estate. Therefore, we will create a team of faculty members across departments and attempt to develop renovation and town management that is driven by design and art activities in the central urban area of Nagaoka.

1. はじめに

長岡造形大学の所在する長岡市では、2010年代に入り、中心市街地の再開発手法による再生整備が進行中である。これは、2006年3月に、長岡市が、郊外分散した都市機能をまちなかに回帰させることの促進と、防災性と利便性の高い中心市街地を創造することを目標に策定した、中心市街地における都市再生整備計画に拠るもので、学びと交流の拠点施設である「まちなかキャンパス長岡」と長岡震災アーカイブセンター「きおくみらい」が2011年に、シティホールプラザ「アオーレ長岡」が2012年に、社会福祉センター「トモシア」が2016年に、それぞれ再開発ビルを整備してオープンし、今後も地方創生の拠点である「米百俵プレイス（仮称）」の整備計画が進行中である。

その一方で、こうした再開発等の大規模事業対象地域外では空きスペースが増大している。中心市街地の再生整備に伴い、1階部分の主要道に面する空きスペースの中には飲食店等の出店が見られるものの、2階より上層または地下階は空き状態が慢性化しており、低未利用空間は少なくない。このような状況の背景にはオーナーたちも積極的にこの状況を打開する策を持っていないことも挙げられる。

急激な人口減少の中で都市経営を持続していくためには、長岡においても中心市街地や合併地域中心部への機能集約によるコンパクトシティ化を進める必要がある。しかしながら中心市街地等の現状は、先述した遊休不動産（低未利用空間）の活用が進んでいない。このため、長岡においてもリノベーションまちづくりの実践が望まれるところである。

リノベーションまちづくりとは、遊休不動産に新しい活動を埋め込むリノベ事業を徒歩圏内で次々と生起することによりエリアを活性化する手法であり、近年大都市圏のみならず地方都市でも取り組み事例が拡大してきている。そうした事例ではデザインやアートに関わる活動が遊休不動産活用の必須コンテンツの一つとなっている。

そこで、学科横断的に複数の教員でチームをつくり、長岡の中心市街地を主たるフィールドとして、デザイン・アート活動がけん引するリノベーションまちづくりの実践を試みることに、本研究の主たる内容である。

本研究には2つの関連既往研究がある。一つは、2016年度～17年度に行った、長岡市からの受託研究（2016年度「まちなか建物更新等調査研究業務」、2017年度「長岡市まちなか建築リノベーション調査研究業務」）であり、リノベ事業のスキームや支援方策について机上検討を行ったもので、「長岡造形大学デザイン研究開発報告書」（平成28年度、29年度）に報告がある。もう一つは、「長岡の中心市街地におけるデザイン・アートワークの役割」（2015年度～17年度、本学特別研究）であり、賃貸した第一安達ビルをセルフリノベしてつくった拠点「プリン長岡」（プリン＝プロジェクト・リンク）において、デザイン・アート活動を試行的に実施したものであり、「長岡造形大学紀要」14,15,16号に報告がある。前者の研究では、長岡のまちなかでリノベーションまちづくりを行うには、リノベーションまちづくりの考え方を、いかに市民のなかに浸透させつつ、じわじわと気運を醸成していくかに尽きることがわかったが、同時に、現時点でのリノベ事業者不在の中、まずは身近に成功事例ができないと、将来的なりノベーションまち

づくりのプレイヤー候補に対して、説得力に欠けることも明らかになった。後者の研究では、デザイン・アートスペースの実践の実験的研究としてのやるべき課題は、物件の確保、運営、プログラム、情報の共有など、多岐にわたり山積していることが浮き彫りになった。いままでは、これら二つの研究が、相互に連携することなく個々に行われた。

本研究では、リノベーションまちづくりの実践こそが重要との認識のもと、これら二つの既往研究の流れを一体化して研究の推進力を増強し、デザイン・アート活動をけん引役の一つに据えながら実際のリノベ事業の連鎖的組成を目指している。

本稿はその3年間の研究の2年度目の報告である。

2. 研究のサブテーマ

本研究は、以下の3つのサブテーマにより構成することを当初の目標として掲げた。詳細は前稿^{参考文献2)}に掲載。

1) 協議会の設立・運営によるリノベ事業の組成促進

リノベーションまちづくりの基本プレイヤーは、場を提供する不動産オーナー、コンテンツを担うビジネスオーナー、両者をマッチングしてリノベ事業を組成する家守会社の3者である。これら3つの基本プレイヤーを発掘・育成するとともに具体的なリノベ事業の組成を支援するため、長岡市と協働して協議会を設立・運営し、以下の活動を行う。

- ・リノベ事業に適した物件を発見するためのまちあるき
- ・事業化構想を立案するためのワークショップ
- ・リノベ事業に対する理解と実践意欲を喚起するための講演会
- ・グラフィカルな広報メディアの作成
- ・実践者予備軍と次々とつながっていく層の厚い交流ネットワークの構築（後述のデザイン・アート活動の人的ネットワークとも連結し、相乗効果を生んでいく。）
- ・具体的なリノベ事業の組成支援（後述のデザイン・アート活動の新たな拠点を先導モデルの一つとする。）

以上の活動の結果にもとづき、最終年度において、地方都市の中心市街地におけるリノベーションまちづくりの実践手法についてとりまとめる。

2) 新しい拠点でのデザイン・アート活動の連続展開

これまでの「プリン長岡（第一安達ビル）」でのデザイン・アート活動は、ながおか・若者・しごと機構との共同利用という制約もあってインターバルが長くなりがちで、アートスペースとしてのイメージ構築や市民への認知浸透が十分に行えなかった。「プリン長岡」は2018年中に契約期限を迎えることから、そのタイミングで新しい拠点に移転（物件選定にあたっては前述の協議会を活用）する。

新しい拠点は専用とし、ホワイトキューブとしての展示空間はもとよりさまざまな形態のイベントにも対応可能な創造的な空間となるように工夫する。運営面でも稼働率向上の工夫を凝らすとともに、旧長岡現代美術館や栃尾美術館、大地の芸術祭等との連携も視野に入れながら、以下の活動を行う。

- ・公開制作、展示、トークイベント等のプロジェクトの企画・運営（教員主導で4本+学生主導で2本=年間6プロジェクトを想定。教員主導の場合はゲストを招聘する。）
- ・日常的な作業、ミーティング等の利用（一部はミーティ

ングイベントとする。）

- ・グラフィカルな広報メディアの作成
- ・地域のデザイン・アート関係者との交流ネットワークの構築
- ・短期的なアーティスト・イン・レジデンスとしての活用（前述の協議会からの事業化支援を受ける。）

以上の活動の結果にもとづき、最終年度において、アートスペースの持続可能な運営手法についてとりまとめる。

3) 互尊文庫移転後建物のアートセンター化の構想立案

現互尊文庫は、表町東地区再開発により整備される「米百俵プレイス（仮称）」への移転が予定されている。現互尊文庫の建物は近代建築としての文化的価値を有し、また、隣接の明治公園とともに長岡の重要な歴史が刻まれた場所である。したがって、現互尊文庫の跡地利用について、本学として積極的に提言していくことの意義は大きい。そこで、先述の2つのサブテーマから得られた知見も活用しながら、移転後の建物を長岡のアートセンターとしてリノベーションする構想を立案する。

3. 2019年度の活動

1) 長岡まちなかりノベーションセンター「まちばん」

前章で掲げたサブテーマ1に関しては、2018年7月に、長岡まちなかりノベーションセンター「まちばん」を設立し、研究代表者・津村は、「まちばん」副代表となり、民間有志もメンバーに加えてリノベ事業の組成促進を図る活動を開始した。この組織は、リノベーションまちづくりを活用し、長岡のまちの魅力を引き出す、まちづくりの主役となる方々（プレーヤー）と伴走し、活躍できる出番を創造することを目的とした組織である。

2019年度は、4月22日に年度はじめの打ち合わせ、6月27日に総会を行った。民間有志の初代代表が一身上の都合で退会したため、副代表であった津村が新しく代表となることが総会で承認された。

まず、普及・啓発事業として行った事業は以下の3つである。リノベーションまちづくり活動の一環としての後述する「長岡芸術工事中2019」で行った「喫茶C!nema」への支援、起業支援団体のイベントの出張講師、屋台プロジェクトの企画（継続中）である。また、広報事業としては、活動のインターネット上での発信も引き続き行った。以下にそれぞれの概要を示す。

・「喫茶C!nema」への支援

11月3、4日開催「長岡芸術工事中2019」の「喫茶C!nema」を「まちばん」が支援した。研究代表者が2019年から「長岡家守同人」の一員として、長岡市渡里町の築40年の4階建アパートをリノベーションし、シェアハウス&アトリエ&オフィス&アーバンガーデンとして運営をしている「416STUDIO_WATARIMACHI」というスペースがある。ここには、特に使っていない蔵も併設されていて、共同研究者のヨールグ・ビューラと彼の研究室の学生たちなどが、「長岡芸術工事中2019」オルタナティブスペースとして、「416STUDIO_WATARIMACHI」の蔵を「喫茶C!nema」にする企画を立てた。

この「喫茶C!nema」は、「座C!nema」の新たな挑戦として、蔵をリノベーションしたシネマカフェである。「プ

リン長岡」で行っていた「座Cinema」のアネックスという感じで、ミニシアターにカフェがついたようなものである。そしてこの蔵の1階ではビューラ・ヨールグのアートアニメーション作品展「エ・モーション」を開催した。その準備から運営までにかかった費用や作業の一部を支援した。

土蔵という建物の特性は、もともと大事な物品を収納する倉庫の用途に使っていたために、窓が少ないので展示や映像の投影等に向き、壁が厚く頑丈で柱が少ないのである程度の広いスペースが確保できて人数を入れたイベントができる。また造り付けの棚などもあり、陳列等にも使える。試みとしては成功と言えるのではないだろうか。

未利用スペースを活用する事業に対しての支援は引き続き行っていきたい。



写真 04 モニタによる映像放映



写真 01 準備の状況



写真 02 看板製作



写真 05 生での音楽演奏も加える



写真 03 既存の棚への陳列



写真 06 作品展「エ・モーション」

・起業塾 Nagaoka STARTUP! × MACHINAKA*

12月13日から15日までの3日間、起業支援センターながおか clip（以下、clip）が主催する起業塾 Nagaoka STARTUP! × MACHINAKA（以下、起業塾）に、「まちばん」メンバーで講演会、講師として参加した。

リノベーションまちづくりは、まちを活用した起業によるまちづくりとイコールと言っても差し支えない。そのポイントは、次の3つである。

- ① 今あるまち、人、物件の特徴を活かして、新しいコンテンツを創造すること
- ② 生み出すコンテンツを持続可能にする緻密なビジネスプランを組み立て実践すること
- ③ エリアを特定して、そこに集中して新しいコンテンツを生み出し続けること

一方、clip の起業塾は、ビジネス立ち上げの基本を学び、それをグループワークで実践してみることで、起業を学習するためのブートキャンプである。起業塾と空き物件をかけたリノベーションまちづくりのブートキャンプを試みた。



写真07 講演会の状況



写真08 講演会の状況

初日は、NaDeC BACE にて、講演会という形式で行い、講演のみの聴講も可能とした。まずは、建造物の保存再生が専門の代表研究者である津村が、そもそも既存ストックを活用することの意味や方法などを自身の経験と見聞きしてきた数々の先進事例を紹介する講演形式で行った。リノベーションまちづくりの考え方や事例などを参加者と共有するためである。次に、長岡の事例紹介を対談形式で行い、「にじろカフェ」高橋店長、clip 高橋代表（「まちばん」副代表兼会計）、まちばん富樫氏が登壇した。そこでは、まちなかで行われた住宅街での専用住宅からシェア店舗へのリノベーション事例とまちの活性化を目指した「はなまちリノベプロジェクト」を紹介した。この講演会のポイン

トは、リノベーションまちづくりという言葉に惑わされず、「楽しく物件の活用を考えよう」ということである。

2日目は clip 代表高橋氏の事業プランの考え方の講義のあと、富樫氏が長岡のまちなかの現状と事業プランを立てるためのまちあるきのポイントを説明して、まちに出た。

1つ目は自分で書店を営業しながらまちを盛り上げるために物件をシェアしたいと手を挙げてくれた I さんのお店「文進堂書店」である。長岡のまちのど真ん中にあり好立地で、本屋をしたい人や本と関係するビジネスプランがある方には良い物件だ。



写真09 文新堂書店内部

2つ目は(有)グリーン土地に紹介していただいた大手通坂之上町市街地再開発事業の真裏にある酒房茶々屋の2階にあるRC造の物件である。狭い通路をくぐり抜けると、フルスケルトンが広がる。以前はバーだったそうで、キッチンカウンターらしきものが撤去された痕跡がある。



写真10 酒房茶々屋2階内部

その他にも、周辺の物件を2つ巡り、約1時間、長岡のまちを歩いた。

今回は、7名の参加者が2チームに分かれ、ビジネスプランを計画した。まずは、物件を決めて、そこからビジネスプランのイメージを作り、ニーズ調査を行った。ある程度、チームで考えた段階で、長岡高専の村上先生がビジネスプラン、「まちばん」富樫氏が長岡のまちで事業を行う理由づけについてコーチをした。まちに何か伝えたいという想いが見えると、また、ここでなければいけない理由がしっ

かりあると、長岡のまちなかで起業する意味が出て事業を応援する仲間も集まりやすいという観点である。

最終日は、ビジネスプランの磨き上げを行うとともに、clip 高橋代表から資金計画についてのレクチャーが行われた。どれだけまちに貢献する事業であっても、経営面で自立できる資金計画が必要だ。実際に資金計画を考えはじめると、必要なお金がたくさんあることが見え、驚くとともに、事業を実現するためにやらなければいけないことが具体的になってくる。レクチャーのあとは、2チームとも、昨日描いた夢を形にするための議論を行った。

最終日の夕方、色々な想いがこもった2チームのプレゼンテーションが行われた。ここには、金融機関で働いている方やリノベーションまちづくりに取り組む方、市の商工部課長などが集まり、プランへの質問やコメントをいただいた。

チーム salt からは、文進堂書店での塩むすび屋のプランが披露された。まちなかにありそうで無かったおにぎり専門店を長岡のお米でつくるという、長岡らしさ満載のプランだ。

チーム spaceship からは、茶々家2階での男性専門の隠れ家カフェの提案である。入りづらい入り口と、人目につかない2階という立地とビジネスマンが多いまちの特徴を活かしたプランだ。



写真11 ブレーンストーミング中



写真12 チーム salt プレゼンテーション



写真13 チーム spaceship プレゼンテーション

厳正なる審査の結果、最優秀賞はチーム salt の塩むすび屋が選ばれた。まちとお米の塩むすび（縁結び）という、広い関係の想像力が評価された。また、惜しくも受賞を逃した spaceship も、立地とターゲットの着眼点が素晴らしかった。

やはり、エリアの価値を想像して持続可能な事業プランを考えることは、新しいコンテンツが求められるまちなかに適してしているであろう。とは言え、事業計画と資金計画をまちづくりにつなげるためには、ある程度のリノベまちづくりプランを示すことが必要で、物件を選ぶタイミングでコーディネーター側が資料づくりをしておく、参加者の理解が深まりそうだ。まちとビジネスを本気で考える機会が日常的に行える仕組みをまちばんとして提供できると、スタートアップやソーシャルイノベーションが起き続ける、新しいまちのあり方が見えてくるような気がした。まちなかだけでなく、長岡全体を考えながら、まちを考えるイベントをまちばんとして提供できるよう、これからも空き物件の情報収集とエリアの価値の把握に努めたい。

今回の企画を行った clip とご参加いただいたみなさん、そして多くの協力者に改めて感謝したい。

・活動等のインターネット上の告知、広報

WEB サイト（下記 URL 上段）および Facebook ページ（下記 URL 下段）を更新し、情報発信をした。

<https://machiban.amebaownd.com/>

<https://www.facebook.com/machiban.nagaoka/>

Nagaoka StartUp! x Machinaka

「長岡駅前」で起業を考えている方へ
実際に起業できるチャンスもある! 3日間

12/13 17:00-20:00・14 10:00-20:00・15 10:00-20:00

参加費 無料
（別途費用）
登録費 92,000
登録金 97,000
（※登録費・登録金は、参加費とは別です）

定員 20名
（※定員は、参加費・登録費・登録金とは別です）

参加費 無料
（別途費用）
登録費 92,000
登録金 97,000
（※登録費・登録金は、参加費とは別です）

会場 NaDeC BASE
（長岡駅前）
（長岡駅前）
（長岡駅前）

お問い合わせ先
clip
（長岡駅前）
（長岡駅前）

図01 起業塾 Nagaoka STARTUP! x MACHINAKA フライヤー

2) デザイン・アート活動の連続展開

2019 年度も引き続き直接オーナーと我々が、「第一安達ビル」2 階のみを、賃貸契約をすることとなった。契約は 4 月から 2020 年 3 月までとした。

ここでの 2019 年度の主な活動を以下に示す。

・長岡芸術工事中 2019 (11 月 3, 4 日)

「長岡芸術工事中 2019」とは、長岡悠久ライオンズクラブと長岡造形大学が主催、長岡市とながおか・若者・しごと機構が共催するアートイベントである。運営は、学生や主催・共催のメンバーからなるヤングアート長岡実行委員会だ。2015 年春に始まった「ヤングアートディスプレイ in 大手通」が、2016 年から「ヤングアート長岡」に発展して、長岡造形大学の学生や卒業生たちの作品が大手通商店街にアートな風景を魅せる形で行っていた。

本研究と連動して行っている前年の 2018 年秋の「ヤングアート長岡」は、それまでの「ヤングアート長岡」を継承しているものの、様々な形のプロジェクトが同時進行というスタイルに改め、長岡造形大学の学生と卒業生、教員、ゲストアーティストや地元の専門家がコラボレートして展示や公開制作、イベントなどを長岡のまちなかで展開した。それを「芸術工事中」というタイトルで行った。そして、「芸術工事中」の各会場を学生が案内するギャラリーツアーも行った。2019 年の今回は、2018 年を踏襲して、しかももっと同時多発感満載に「ヤングアート長岡」から「長岡芸術工事中 2019」にリニューアルした。

芸術の力で芸（デザイン＆アート）の街に。

生きるための様々な工夫を探る力となる芸術は、私たちの生活に欠かせない。ハッとすることや、なんだかわからないものに触れてみることで、日頃の当たり前が、なにか新しい姿として見えてくるだろう。新しい価値や、これまで気がつかなかった価値を発見すること。長岡駅前、大手通周辺に出現する“工事現場”は、そうした刺激をもたらす場を目指す。

もちろん、「第一安達ビル」は、オープニング等の会場や、展示会場となった。

また、先述したように、「416STUDIO_WATARIMACHI」も「長岡芸術工事中 2019」オルタナティブスペースとして、このイベントに参加し、1 階、3 階、4 階の一室を会場とした展示や蔵での「喫茶 Cinema」など、日常の暮らしと非日常のイベントとを融合させる試みを行った。



写真 14 「416STUDIO_WATARIMACHI」 4 階 503 号室での展示



写真 15 「416STUDIO_WATARIMACHI」 1 階 102 号室での展示

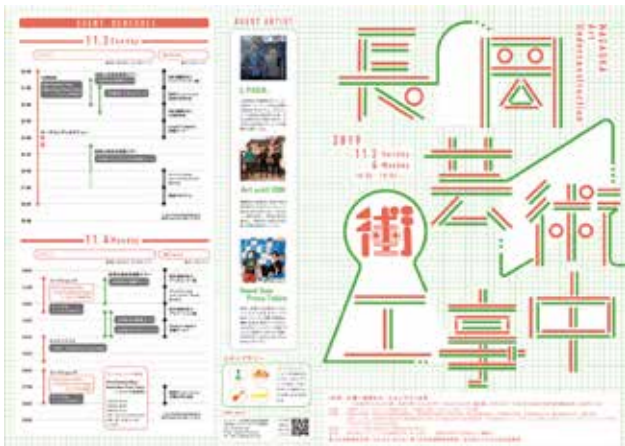


図 02 長岡芸術工事中 2019 フライヤー



写真 16 「416STUDIO_WATARIMACHI」 中庭から望む



写真 17 第一安達ビル1階でのオープニング



写真 21 第一安達ビル2階「座 Cinema」でのトーク



写真 18 大手通りを行くツアーの状況



写真 22 L-PACK.「定吉と金兵衛」-Archives-



写真 19 ショップイン大手での公開パフォーマンス



写真 23 いかげやまかな公開制作



写真 20 第一安達ビル2階でのレセプション



写真 24 PrintFactoryShop ワークショップ



写真 25 第一安達ビル4階での学生の展示



写真 26 ショッピングイン大手での学生の展示



写真 27 オープンアトリエ「フワアトリエ」



写真 28 「スズランド」での学生の展示

3) 互尊文庫の建築史的価値づけ

2018 年度にまとめた互尊文庫の建築的な資料調査報告をもとに建築史的価値づけを行った。互尊文庫は、それまで「書庫の延長」に過ぎなかった図書館を「市民に貸し出す」ための器として、吉武泰水東京大学工学部建築学科教授（建築計画）を委員長とする日本図書館協会施設委員会の専門家たちが利用者の合理性を追求して当敷地に合う形で計画したプロトタイプ公共図書館である。しかも現存現役最古の施設委員会設計の市立図書館である。戦後民主主義によりもたらされた地方都市の市民のための公共建築を率直に平面・断面で表現した、日本におけるモダンムーブメントの一つの表れとして、長岡市民に愛されているというローカルな範囲だけでなく日本の公共図書館の歴史にとって非常に重要な作品である。研究代表者はドコモモジャパン（DOCOMOMO = Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of the Modern Movement：モダンムーブメントにかかわる建物と環境形成の記録調査および保存のための国際組織日本支部）会員であると同時に、日本建築学会歴史意匠委員会ドコモモ対応ワーキンググループの一員でもある。そこで、2019 年度「日本におけるモダンムーブメントの建築」選定建築物に推薦した。その後、2020 年 5 月に正式に選定された。日本全国 238 件（現存しないものも含む）選定のうちの一つの仲間入りをした。今後は、まちなかでの位置づけを明確にし、デザイン・アート活動との連動を図りたい。

4. 2019年度のまとめと2020（最終）年度に向けての展望

長岡市の中心市街地でのデザイン・アート活動とリノベーションまちづくりとをコラボレーションさせ、新たな展開を図ることが本研究の目的である。初年度に「肌感覚でのまちなかの動きの把握ができておらず、直接の関係者以外の方々を巻き込む情宣活動ができていない」「本稿で紹介しきれていない活動もあるが、それらの発信の仕方も課題」と反省したものの、2 年度目もいずれもそう大きく改善はできなかった。「我々の通常の研究活動の一部として本研究の活動を組み込むことがいまだ叶わないことが大きな課題であるので、少しずつ障壁をクリアーしていきたいと考えている」という状況も変えられなかった。しかし、「長岡芸術工事中 2019」は、既にまちなかで起きている低未利用空間をうまく活用している活動とデザイン・アート活動をまちなかにもたらし動きが、ある程度シンクロする胎動が感じられた。非日常が日常になるには地道にやっていくしかない。だがあちこちに萌芽も見られ、継続的なアクションが必要であることは否めない。

【参考文献】

- 1) 遠藤良太郎ほか「地方都市中心市街地におけるデザイン・アートワークの役割（その1～その3）」長岡造形大学紀要第 14、15、16 号
- 2) 津村泰範ほか「デザイン・アート活動がけん引するリノベーションまちづくりの実践研究 その1」長岡造形大学紀要第 17 号
- 3) 津村泰範「互尊文庫の建築についての資料調査」長岡造形大学紀要第 17 号